

副腎偶発腫に関する研究

研究分担者 上芝元・東邦大学医学部内科学糖尿病・代謝・内分泌分野・准教授

研究分担者 曾根正勝・京都大学大学院医学研究科・特定准教授

研究要旨

平成 26 年～28 年に行った副腎偶発腫の長期予後調査の継続的解析を行った。さらに、日本泌尿器科学会、日本内分泌外科学会、日本内分泌学会と連携し、国内外のエビデンスを収集したうえでコンセンサスステートメントを作成中である。

A. 研究目的

副腎偶発腫についての国内外のエビデンスを収集しコンセンサスステートメントを作成する。本研究班で平成 26 年～28 年に行った副腎偶発腫の長期予後調査の継続的解析を行う。

B. 研究方法

本研究班で平成 26 年～28 年に行った副腎偶発腫の長期予後調査のデータを使用する。日本泌尿器科学会、日本内分泌外科学会、日本内分泌学会と連携し、国内外のエビデンスを収集したうえでコンセンサスステートメントを作成する。なお、本研究は済生会横浜市東部病院糖尿病・内分泌内科 一城貴政とともに行った。

（倫理面への配慮）

慶應義塾大学医学部倫理委員会の承認に基づいて行った（承認番号 20170131）。

C. 研究結果およびD. 考察

ホルモン非産生腺腫と考えられる症例でも経過観察期間は3年以上、可能であれば10年間とすべきで、経過観察期間中のCTおよび内分泌学的検査の頻度については、画像上副腎癌が疑われるものでは3ヶ月毎の再検が推奨され、それ以外では初回のみ副腎癌を念頭に6ヶ月後に再検し、以後1年毎3年間以上の経過観察が推奨される。また、副腎偶発腫に脳・心血管障害および悪性腫瘍を合併する頻度は高く、早期より積極的な疾患管理が必要である。

日本泌尿器科学会からは副腎腫瘍取扱い規約が発行されている。また日本内分泌外科学会からは内分泌非活性副腎腫瘍診療ガイドラインの発行が準備中である。

E. 結論

これまで集積した副腎偶発腫症例の長ホルモン非産生腺腫であっても脳・心血管障害の発症につながることを念頭に、早期より積極的な疾患管理が必要であると考ええる。

日本泌尿器科学会、日本内分泌外科学会、日本内分泌学会と連携し、各学会からの見解が矛盾なく一致するようにして、コンセンサスステートメントを作成すべきと考ええる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし